

1. 洋の東西を問わずその時代の被服は政治、経済、思想等世相を反映しているものであるが、日本においても絵巻物、大和絵、浮世絵等においてその時代時代の風俗が巧みに画き出されており、これは服飾の上からも参考になる貴重な資料である。現在和服の基盤となった小袖は初期においては、肌着として用いられていたもので表衣が大きな広袖であったため、防寒用として袖口を閉じた筒袖形式のものであったこと、大きな広袖では非活動的であるから急場に備えて袖括りを設けたこと、この必要性が次第に装飾的なものに発展して広袖を飾るものとなったが時代が流れて、広袖が衰退し下着であった小袖が表衣になって後も、絢爛豪華な時代では、広袖における露を偲ばせる袖飾りが付けられていた。これが浮世絵の上にとどのように現れているかを研究の目的とした。

2. 浮世絵の中に袖飾りが画かれているものを選択して年代別に、その時代の流行を掴み広袖における置口、露と比較検討し合せて世相の反映をみた。

3. 庶民文化の発達が発達財力にもものいわた美、これは平安時代のような優雅な美ではなく華美なもので種々な袖飾りの中にも、その一端をみる事ができた。